





心移る也

青の軒様蓋



心移る也

心移る也

心移る也

心移る也

心移る也

心移る也



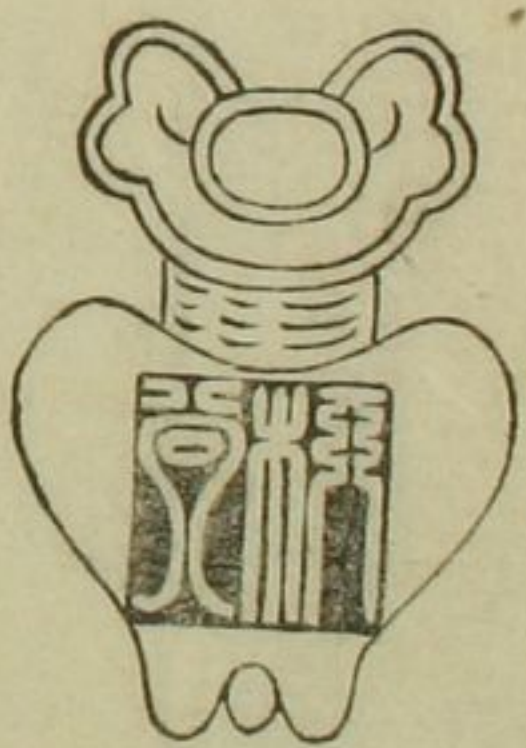
七月の集結してまこと
くの間は花をなすぬ吟吟
けくや艾子が猪腸に
ぞも法籍の一石にほろと
池原のまきらけりおもて
こ作亭のたぐさ
るひの晋子よして昔と
志くは袂に糸掛えり

あやうらと清流の跡
いよ携来れ切と
みとかりしきあとの
枯骨のまじりて礎と

定延己巳五月

ワス上

榊谷史序



集行くゝ志は志まらなるゝ
かやみゆい結はくゝ麻るし
らまゝゝゝゝゝゝゝゝゝの
たゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
わゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

後々之へは又体格のぶらり
 降したる皇別ふやれもの川
 ちりしたる心半舌と敷て
 端あがり大石並サハナミれ系流よ月と
 心とを湖へは田毎に府らる
 何とれ新々々々々々々々々
 まらとさるるよまろ雛の心と
 夢らうと一生と夢ら銀河の
 篇よきらかまきくハねん入と

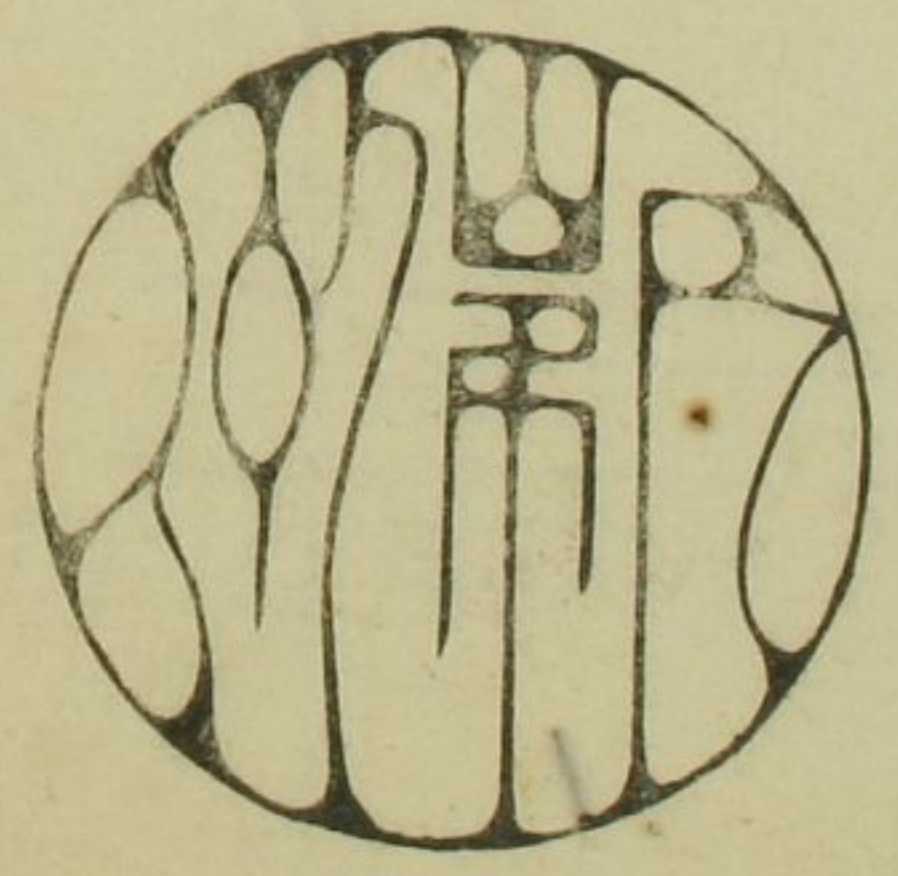
鯨もま——夢らうの片山れ
 しくはあまゆめのと生らるる
 六ころはまじしハ点々々々々
 夢らて又くは花もあつ七十二候
 心とを湖へは田毎に府らる
 何とれ新々々々々々々々々
 夢らうと一生と夢ら銀河の
 篇よきらかまきくハねん入と

ワス上

三

云葉之わくさくは只江こ、
虎胤のたまへよして後と
ちり養ふは師恩

自梵庵



にさるくや旅路にたもせれ獲
くまなく山まよひはしと
月ふらひ極と接る和国の原
新眼肉此はと吹く憲
大よれその考顔くその考也
周^キ草と石く指ふふとん
三川^ハ水川^ハ水川^ハ水川^ハ水川^ハ

止

五

所をの夢が裏所なり
こ指風呂は洗ひごとく眠る處は
酒籠の名を女房と唱
ゆふれきて西湖八景より
つひのわづらもねよこは
はつしたく將意とこり持て
蚊のこゝは仕舞衣の香
見と敷くさるうハイしれ川

一持文く派院ハ述ナリ
鳥の月之く振るるる粥あり
芝草れさるう若て羽衣
白層の家より列さるる笹のくは
ふみ抱の鏡と母よ秋風
女國のくハ心の花咲く
やうく蛇ヲロチ捲れとや
糸肉くく呼ハ上ハハ

色はぬい時を名とせて冬

郭を鳴るで叶ぬ飛すまじり

挿すまじり廻廊の色

強力のじい柱は折れぬと

毎ヶ今もくくはあまも

只の喜と大なる大よしくさき

折るれまおよ切つくり

二井寺よまは遠くをまこれ月

白のあはれよまぬましくあ

あうまーれ誰やういこく

月より宿よるをましく

水桶の文守海物に溜り川

老の尻換をまて向より

立寄よ蕭れ久まは海子なり

お年よまうしゆ娘泣き

あし涙と大挺貴くまは

ワス上

二

山家の暖氣温泉に湯を
 お集する中よふふぬみらぬ
 酒の香拭くぬまぐれ
 月之く月とぬく庭の白^{こも}雲
 吹はまふきつる品^{ヨム}と淡
 鳥飛ふし自ひぬれしけわを
 花のも枝よむらとえし
 舞のよ尾ふれ名ふしげうて

志うはこころぬら^笛也し
 介時ふらやぬぬら^端もま
 枝し^まぬ^くふ^庭ぬ^も
 たらま^よぬ^ぬぬ^ぬぬ^ぬ
 し^ぬぬ^ぬぬ^ぬぬ^ぬぬ^ぬ
 優^海寒^ぢぬ^ぬぬ^ぬぬ^ぬ
 こ^ぬぬ^ぬぬ^ぬぬ^ぬぬ^ぬ
 らあれ^雑系^ぬぬ^ぬぬ^ぬ

於此の蟻ふるぶく
雨後の風がくまへと掃ぎ
新屋のあなをわがしれ
明月の敷れあらしが整りたり
牛とふくまは思ひはた
狗のきつゝの神は吐せり
たしきもの物れまま切
此建地人かよふま士しけり

萱屋に軒よぬくは雨滴
ますゝ男がむしと向は楳枝
念草うよよハ痛まふよ
浮揚は雨屋のつゞる楳の音
すれられ嵐食や枝は母
月山が鉄床たわし虹を吐
茶うゝ勢はきつゝの礼
仏のまゝくはの花は咲ものを

夏之腐あゆまぐさ風の白く

やう居士七周れよ白れ遊あひ

老の袖とつゝ秘して済しと済

捨石

土まじやまの件一の月も袖の露

ササよ。紅紫ふよなうと系何石 白梵

秋もや、店屋の標よ遊題く 藤乃

伏見のかる籠が疥をかてり 仙角

明海の、壺急頭よさぶまりし 二風

うしハの揃ねよ志をうく 石

之法よ家杯宜年あて神古く 梵

昔アアといふ花あつゝくてもさ 乃

くま此の、くま目待し、法の花 角

水よ名あまは春の草とく 風

奇水

石よりわらうと音なき醒すは秋の風

持てくさるゝわらわれは梨子

照る月よ小治ひの影れをけりて

おろの後すゝ鞠うすうきり

葱さくく挿ようらんハ殿りく

お裁の底繰りけりまきり

あけふと暮は八馬を抱て藤て

白梵

柳之

南川

塾所

松岳

為波

川童のどく大木れ口

午云れを店廣製はわらひ

串れ園子れ業せはぬ舞

この向はん水さの袖は歌をせし

的うぐしはくさの一日

枝折の紅葉茶籠よきて飛ぶ

浪波よまよふこれ舟とてゆ

詩と伝ふ那を命八月も掲きて

水

梵

之

川

竹

岳

波

水

か—ぬきまが大名ハ—

麓道ハ花のく—いともぞり

れとろくぬ場をふつてるは糸

のハ永—仁王が海と指さす

風呂で調こハおまろぬり

業れ後の乳房も付くもけわす

擔ふともして介れはえ

産代のおとさるく鶴の影

麓

波

川

竹

岳

之

水

川

柏の標あもく—あ目又—

生れ之ちよ蓮艾れ竹ハ—

元祖のま尾を出—て泣

舞初れ雲英—はあすもいおん

きのこと—たは山よ傳幕

夜の月け所を—連テごめ

又何よらしり—は狼の影

ふのよ—く—あよ。徳ぬとまづして

波

三柳軒

竹

岳

之

麓

九九

波

抱ふ蛇ふ乳ふと一きり

川

の原は白くまぶ片所ハ朝霞

馬蚊

埃よんうとて鼻城の雪

岳

焼香ハ園より月花慕ふ

竹

痛蔓又女く結ふ春その

梵

可考

文巻よ字了周縁れ抜葎ふ那

之くの契とまのく蝉

白梵

ふ鏡よとと一透コト月悲く

三林

ふこの世の山よとこい

白浩

下たれ肩と心ハ上たれ結るん

梵

け捨出しいらと一善信う

考

松枝と結つて斗一廻廻 白

浩

ふわととひと海に白る

林

呷らるば口と唇とと夕ら音

考

ゆゑい錦木挽まうもする

梵

栴札の神の式もてわたりて

林

こゝろの狸突息しつゝも

浩

幸ふとわまう難投也三日の月

梵

土倉方の山流は新神の福

考

西れ風おこふと新とをまよたり

浩

舟とたふると車は貫之

林

咲花の流ありとい知りたう

梵

草行しききて流れたる暇

浩

目れ走りにて流生れ即ち

林

今つらやよやうな旅

考

上着の片も男は捌くとい

浩

川きつは敵よ墓をさす

梵

夕晴し護られ柳とおさうて

考

そよよとあつたお池の音

林

鳴くさう白鳥の寝ころ小池の

梵

鳥よふと志しる足

地蛭

九尺間の飛流屋におす大礎

縁

歌く世をちるきの馬

樫木

重敷のふらとて夕比まりし向

梵

茶をうらふよ志として感

大

張書く外ハ月訓あわさる

蛭

らふ志をえでし神ふれ脱

太

隠ふいでふ松年と袂

木

くわくしるも十三世の月

宇

百りしれ葉よ虫食れ惣ツチ思

太

くふ良ハるる葉れ香よ匂

梵

堀出しの山えしりるツチ新し所

大

纏ケヌキみとし口をゆてり春

蛭

くまのすしともやで介と行

太

唐地ともくよ世の希

木

撰

川の魚ハ深一舟の

の方れ錦一の魚を山

これ月札の夜影給ふ似せて

にうらうらぬ。涎を吐く

臭らうと船よふ。ひまは波

ねよとすこと指のゆく

月金魚の湖よに舟人の詠や先

くくくくくくくくくくくく

胡麻塩よま〜〜指よれ又止

薬の紀の意の目わす

まへハ在郷に花をむす

ひ〜れ武士がま〜〜

方大れ春盤海〜〜

〜〜と以善味味と撰書

首筋れ大海屑つ〜〜

了大

地蛟

甫太

白鹿

象

大

木

太

蛟

字

梵

木

大

蛟

撰

廿七

飛ぶぬ蝶ハけ部ニキク

太

早もともや一又守つてたの花

梵

ちりちり流る袖のつと世

宇

扇招

下さゆぐ指士衣と山の隈うね

ぬるさく〜〜〜古の月

白梵

虫屋敷の春婦〜〜〜吐喘て

吐毫

さうつさうらうら〜〜〜

里意

一わ〜〜〜立てるぬの原

活周

お嶽よ帯ハ旅〜〜〜

旭牛山

おね交ハ責子た〜〜〜お〜〜

野水

昔笑よ〜〜〜石葛れ露

宇軒

復も別とハ指よ山 任 指

杜月

うほ〜〜〜と虹の秋よ〜〜

源梵

侍青の影又出〜〜〜白

虎腸

くしくと白鹿よ回不又家县 虎遊

折の血れ柳くさくさ 雛の袴 虎

虎居れ那ノとまぬてまろ 招

垣境ふ車丹れ言そりか所 意

産こ子抱れ女と遊せり 竟

撮こり牛ハ寐てこ折こ花このこ 山

を腹無く滝とくだてく川くをく 因

鼻とく娘は雛の別こ也こ 軒

とととととてぬすく昔切り 泊

是よ寐て土よ寝こぬ大悦こ 琵琶

大の喰こくこ途こをこ等 月

代紐こ又首の川こをこ雨ことこち 苾

仔細の氣こはことこ之こ呼 腸

芥こ之これこ月これこもこ房こはこ是こ之こ法こ 招

書こ又こよこしこんこげことこ西こ此こちこらこがこ 意

秋の風吹こぬこるこをこ矢こ若ことこ道こて 毫

まゝ寝中やせうね 母 山
 貸をしよ備せり大島らきわ
 東れ舟の岸に届りふりきり
 舟掉よ水をこきり夕の影
 ふづきとよしと武士は
 後より此湖へばふらぐあや
 又色の後よあうり呼吸
 咲花のゆきハ氷もあやう

道はぬ枝のやまのこ

揚

布 磧

こもたやまよ浪音れ浪志が
 尾岸よま露れとら村莊 白 磧
 萱れ軒系志ぬ家夕月 儿 浪
 多居よ飽バ吹ぬぬ 末 白
 かし中れ子代際きよ郭 黛 列
 けしうらとこ届てはわは 嵐 記

引くくくく水板れ葉の葉

梵

留のりまよ一尺と知くはく

磧

抽のりあうも如衣袋はれはん

白

おの廓一トれ書くはく

隠

あやうくよ書きしきき女の隣

弘

市旅と越せはくゆはく

州

生翹の番をりりや月

磧

晚船のりりや月

梵

極所のそよふんよ百舌の声

隠

振袖のりり小鼓の聲

磧

能中吉野の聲と花のいろ

州

かきうくのりり石のりり

白

日ハ水一圓取温純踏んてり

梵

尺知のりり声と舟のりり

流

散積と掛るま似して廣きよ

白

さしあふりりりり入海

隠

飯時のみ思ふて夕づく日

磧

ささめすまが鏡のちかし

州

木のまじりおれおぬのハカマ

流

草摺かゝる揃うに月

荒

意深しき意隠してハカマ曲

流

じしめまゝせて悪き大

白

市車れんがーかゝぬ方たぐ

州

しききかたかゝるねんか

流

けん流の醫者かゝるかゝる

荒

妹とよして海をさるる

磧

流とねんこ糸のじすこ

白

蓋もこもよ片々毛櫃

流

花散りしハカマひやゝと巻

流

かむけハカマはまきり曲

等

湖青

今も昔の情や常しく是れ花

こころをさすも是れ枝

白梵

入るよその月見も真をん

漱流

けん砂よをこころちの

文よ致
楚推

しづかしの水と是よりたつこ

都雲

亭の意くぬく楯の雲

里志

おりのは影もくさぬさる

己千

笛入きく指ぬぬをぬ

泉之

馬の尻より馳りて店のま

其朝

松糖も焼く者れ肉も

香

丹塗られ縛かしくはのま

馬遊

ねよつたれ浪とびすひく

流

女はハラムの持やれら法よ

樵

舟の蚊こころ天井の徳

雲

活ぬれとくんとつて移

志

野を去りし中々〜 讃波浪人
 へは〜と花は昔に花は昔に
 朝を〜 寂あつて声の残り
 吾を〜 名は故郷の心
 桂謝は後れさ思ひのこも
 海は〜 わくは〜 海は〜
 喜田れ風のら〜 んを
 舟は〜 舟は〜 舟の舟の舟

千 雲 朝 之 笑 流 志 荒

別〜 思ひれ〜 涙の心
 老〜 入り 園口流〜 舟の舟
 庭は〜 舟は〜 舟の舟
 空陽れ舟の舟は〜 舟の舟
 舟は〜 舟は〜 舟の舟
 舟の〜 舟は〜 舟の舟
 舟は〜 舟は〜 舟の舟

延 朝 雲 舟 之 笑 流 志

こねの品のもちく力ひく

三鳥

むく太の油の端まで夕方の音

千

十八日ハセヨに浅井

朝

君とハ又袖よりうけて花の香

可花

君の志らくよのうらみ

之

霍廟

鈴の月の古は去るて社を

啼く飽をぐいこも義表

白枕

稲の波より一穂より海へ

六班

冠の初よりと亭にぬく

河水

風わくくなく掃掃^{セウノウ}みませく

家文

あまのうらみは猶もくぬ

園水

麦食を振舞てをる波の音

有笑

園のありし笑のりく

草工

緋の幕の紐もあやう

捕立

名れあはるる芦れ上^の跡もなき

班

け備屋之^の夜替^りとて入るり

梵

人^の語^を扱^りや^りて又^も言^ひ責^め

孝^の鹿

新^しも^も志^する^る名^の越^えの^言れ^月

井^の蘇

都^よ丁^と枝^はら^とま^り

府

空^を相^見つ^て原^を苦^しん

水

女^をあ^れ扱^りま^りま^り味^の舌^の舌^の

青^の笛

花^がろ^ろ離^別の^跡ま^て入^の跡

園

白^い仁^王の^跡ま^りま^り

文

別^れま^り市^中れ^在る^まり

工

鹽^一翻^をあ^らん^でゆ^く

矢

年^のま^りま^りま^りま^り

机

漢^の後^まり^まり^まり^まり

立

椽^側ま^り麻^の言^を蘇^とま^り

鹿

月^の名^所の^跡ま^り

水

心^のま^りま^りま^りま^り

麻

淀川つる水の初こま記

菟

亭茶の自傳よ流る馬れ足

笛

あゝ陽のさそ降ひや

絲

重なり割きハ生々しく暮し多

文

又建ひふれ出ぬと暮るの

圃

あや枝のさつろよるれきも妙の王

笑

のさそ風をそ吸ふと

工

流るれ歌よ体るるおの肩

立

ねのろろとつめて夏腐る

斑

歌り神の子れ花ハきよと咲

水

とそ茶れ込いきぬくしる

鹿

池天

月夜一介と梅のさひ歌

新芽ハきよとく能れ花の風

白菟

明かりささるひししくね多記く

柳紫

りすゝ大^{カケ}樵^{カケ}を足代

鳥畑

おく極れ湯わづり本^{カケ}樵^{カケ}を^{カケ}極^{カケ}道

化呈

椽の^{カケ}み^{カケ}お^{カケ}ふ^{カケ}よ^{カケ}朱^{カケ}れ^{カケ}夕^{カケ}虹

鳥農

枕^{カケ}磨^{カケ}と^{カケ}逆^{カケ}よ^{カケ}子^{カケ}牛^{カケ}し^{カケ}け^{カケ}と^{カケ}事^{カケ}

坡伸

柳^{カケ}の^{カケ}椽^{カケ}ぶ^{カケ}て^{カケ}ら^{カケ}つ^{カケ}つ^{カケ}て^{カケ}螺

馬く

橋^{カケ}と^{カケ}名^{カケ}れ^{カケ}つ^{カケ}く^{カケ}酒^{カケ}と^{カケ}ま^{カケ}り^{カケ}て^{カケ}り

幸貞

や^{カケ}ら^{カケ}お^{カケ}し^{カケ}て^{カケ}ま^{カケ}ん^{カケ}よ^{カケ}ま^{カケ}り^{カケ}て^{カケ}ら

天

新^{カケ}種^{カケ}よ^{カケ}す^{カケ}ら^{カケ}り^{カケ}の^{カケ}〇^{カケ}の^{カケ}何^{カケ}れ^{カケ}る

荒

ね^{カケ}黍^{カケ}と^{カケ}ま^{カケ}り^{カケ}よ^{カケ}紙^{カケ}賣^{カケ}が^{カケ}事^{カケ}

茶

鼻^{カケ}れ^{カケ}下^{カケ}刃^{カケ}と^{カケ}立^{カケ}て^{カケ}辛^{カケ}み^{カケ}指^{カケ}せ^{カケ}ら

畑

りの^{カケ}名^{カケ}越^{カケ}し^{カケ}て^{カケ}な^{カケ}も^{カケ}磨^{カケ}ふ^{カケ}林

農

意^{カケ}致^{カケ}く^{カケ}皇^{カケ}と^{カケ}つ^{カケ}が^{カケ}よ^{カケ}や^{カケ}り^{カケ}れ^{カケ}新

茶

す^{カケ}を^{カケ}糸^{カケ}ひ^{カケ}て^{カケ}妹^{カケ}が^{カケ}針^{カケ}一^{カケ}業

伸

延^{カケ}が^{カケ}れ^{カケ}懐^{カケ}城^{カケ}や^{カケ}は^{カケ}し^{カケ}て^{カケ}花^{カケ}と^{カケ}ら

人

温^{カケ}繁^{カケ}れ^{カケ}あ^{カケ}こ^{カケ}れ^{カケ}蝶^{カケ}と^{カケ}燕^{カケ}

呈

腸よりけしきまきと床にけしき

七子村く内くく石

くハ風と屏風は萩よととん

とと森の葉と蛇のととや

立向の足付てけしきとけしき

まき物のきくまきよまきよ

帯の沙汰未産わたりの帯と

把牧

白虎

信安

枕流

野角

巴

北向

かりくまのりりり新よまきよ

為降ハ風品てけしきとけしき

わの葉くまはけしきのけしき

くよ解くよまきよとまきよ

舞一つよまきよとまきよ

このれ月とくまのけしきをま

けしきとまきよとまきよ

けしきとまきよとまきよ

牧

流

安

雲

角

牧

虎

安

竹所よきとせし吉原此等

くしてハ花積事よりわ

事れ花よハいきく以下切

永きりと小使もせぬ者くは

大い候よわくじお 鑑

お〜〜新れわをよとめ金

海〜〜鞠の馬くわらう浮

清毒れ之けはハ道き〜〜く

流

角

雲

梵

牧

流

皮

雲

近江のかハあぬ 八景

難のわ時定りて日れ出さく

下流もなると〜〜〜

浪浪は海よ〜〜〜

又系あさりれ〜〜〜

牛九月は月ハ二川よりすみ

文り船と白^{タハナ}流^{ハナ}江^ナ可^キ

利刀よきとせし抜葉れ一つ

角

牧

何

皮

流

角

雲

何

解せれ這ゆる母れりらん

牧

方角れ育よぬがらんんこる

流

つとつと流るる書

史

さげてハのさうらん花も咲

雲

柳の流る袖の玉ころ

角

草笛舎

枝ゆきてとひよ信らん春の時

睡あつ可くおれ日の入

白堊

月とくや輪輪よ去るわよせて

野角

わさぬ勢子雲よ捨ひて

熊子

流書もいつ果しんるる大ぬが

大狼

穀のさつとてきて行く

孤月

風吹る時帆はれを想え

幸古

美しきものよれりぬいぬい

雨船

信のよもいふてよはなかり

宝角

施よハ世に在る地へ下

禪法の母なる川にまよふと

朝あけししく酒も飲し

富れ月夜もト教よつとて半

はちりししと川よ立所略

ますし男が座をとりなく兵庫曲

鑑法い舟にて昔は徳投也

のらせくの花廣りて又も音と

笛 角 子 狼 月 白 鮎

燕の横きま夕まぐの流

持屯の海と梅庵よ出代つて

うらもさるるよ座ん處を傍

こしすしひさみりてさし向

夕暮る遠ゆく美しき地

つらつこれ海歌呆て系れ葉う

花後れいしげんや袖形

け山のおさきしよもあまもり

雨 笛 梵 角 子 狼 月 白

啼ぬ麻子く 笛より子あり

鼈

月清し 滯る大只ホクシの空いざり

雨

涙しの 籥と竹の半し 籠

笛

水くち 武士顔より 八かきよ

梵

お戯よの ごとく 大い 珊瑚珠

角

城守より 指ふれ 斗のまき 神心

子

常より 掛ふ板 登り 物蜘蛛

狼

明日と 待し 能ハ 珍地と 鳴るん

月

便り 舟海く 坂本へ 小

白

美おの 花よ 原へ ごとく 地の花

角

あききき 舟水ぬき 舟

鼈

地蛟

揺持り 指よ あり 里川 秋の 敷

池の 旭よ ねりし 月れ 水

鷹 旗

涙に 多き 琵琶 切し 女目 かくて

秋 石

くみくこ上戸と香をきく

里蝶

天舟のねまをきかぬをとり

右角

お津片くはるは夕虹

蛟

啼まの所もやどく大鼓堂

候

夏唐片のよまきかた酒

石

花とゆく蝶まの花よきき

蝶

44 とももききくはれは

角

虎腸

瞬^ケまのたの地籠の夕日那

名と動くうそあはる

白梵

秋葉れま^{タハ}の風と露の舞

霞橋

大まの舟よあそび

柳流

まの月をゆく遠矢のつり

長志

伽よとらじこく蚊もな

湖涼

おまのせはつとく世の風

鶴了

わろくセグ君よいぞわろく

吳京

真旅の親と志をせぬわづらひ

州之

上と仕さるる下れ敷

橋

挽子の奉加よ牛も啼てけ

光

欠ヶ摺印と桔梗よ六照

猫

まろしるの山六月夕方史々く

源

女おくの混むとつ

志

貴将のあよまぬと實てま

流

そと月よ志くたき深の袖

之

たしきまじし花をさし芳しに

蒨

まぬいのりよ即ちまはま

于

州巾

社の鏡今よ波はと水れ音

糸山よつとく小田た夕風

白梵

水車れまじし月のを了了

圃鶴

春もせりき流波の鞠

無名子

桐花を不堂よ使考れ地ま

竜爪

夕岬の瘳のわらも足ぬ

板倉

らうのまふれ指さる此光の山

巾

わづし〜れ定〜ぬや

龍

もう磯月れあま〜かうて言直

春

く〜る香炉よ伽陀の如く

仇

〜と平よか〜ぬ花の市もい〜

名子

又出〜して〜渡〜ま〜れ〜

等

竹巴

ニそれ今産よち〜ぬやき〜

く〜け〜の方〜

是棠

潮〜よ〜唐抄音も舞〜

危朴

朝〜し〜

世受

もれてハ花よ〜を招〜

千丈

夜よそく夢れ年袖

東正

雨篁

一雨の後のひかりて花柳哉

清くハきりし清き花柳

危卜

花柳きりし花柳やぬりし舞

登鯉

舞ふハたつこんきり花柳

東正

と銀の猫動くうと東正後

卜

曇月れ強の初く花柳

鯉

人知しけ花柳のそよそくて

正

つみせぬ縁と結ふ子歎

草巳

城川白川至任

偃三

秋風のかさうり花柳

流るハ流るハ秋川の月

白梵

紅葉山小れ花柳

乾梅

哉舟をさし海に舟帯

櫂

伝玉れ消る仁王をくしれ音

梵

久しに名のしけ糸れ竹

予

つぐ姫の花をさすくさす枝配

櫂

さすくハさすくさすれ聲

揚

あまのここの今と名つあま

け筆れ糸く日わりさうきの

つらとわきく行まされ

えし〜〜〜の

ねま

空梅の二が空くし唐能春

病れは痛く〜〜〜の

白梵

沖を舟の帆を突舟を底せく

舟

鏡の縁を杖をさす

杜林

新^{サス}叔^{ニク}よ切娘つ〜〜〜の月

虎物

世々くもやこれ風くくも此

佐安

世所名所と白ハゆいけり

鬼出

焼く保くくこの焼明

廟招

少老のおりまこれ何この書

杜月

くすま飲まゆる産月の馬

吐竜

空れ蚊よ指とのよすうけおま

六斑

サくくくおりのめ時佛く

虫

新さるまこれ二不四ハ何とそだ

虎

也く三里ハ池田れ夕月

ト

おわーくこのわくくおんそと

林

亭一れ過ひの進此トケね交

糸

おわくれ多結ひけく花の枝

招

舞るれ木の女ま香よ白く交

月

之楓

初なるこれ柳やよ白ん年の初

かゝぬ人よと音れ月

白梵

響びし傳後流れと橋よどく

雲々

山れつてまはるるささ

湖原

俄面わく音響のこもるささ

松波

よちとともさし城の松と

村巴

此賣れよと本日海がわく

梵

温泉入もてんがわくはな

楓

ありし吹松しとく白く

岩

きらられ月の産輝石燃

雲

そよ風詞の花れつとせら

巴

鳴りせぬと解ハ終り

波

冬ト

きらられ月の産輝石燃

後すとも風を萩のつと

白梵

きらられ月の産輝石燃

杜林

白紙

白紙

若飯好みのつらふしは

群鳥

茶葉久事しつれむら

青波

るハ志ざひよよとせむ

一知

三井の瘴風終よづく南風

暁竜

誰うゆつるまで廊のころさ

波

合おさわちつハ花の錦も

梵

又天の指の波しゆす

ト

そむ香ハいづく香結き

鳥

栴の空麻のちつき貝栴

林

きりり〜りゆ〜とせむ尾の

知

六糸流うそ秋わ〜しり

梵

舟のゆ〜月見ハ何と知ぬ

ト

廣〜〜〜ハ陰のす〜

毫

ぬ〜〜〜ハ花の誓とめ〜

波

福活の草也〜ハはれ梅檀

号

海ハ〜〜〜ハ〜〜〜

林

イナカイ

四十一

娘入部げが肩の是く

旅籠屋の末笑も宵の秋とく

能く舞物よかしく穴を

ね風の葉はなほらさしく

き田れ水の文のひし

投ねしは浪笑山を捕りて

鯨あつきの掛り

意してハ水干よさるるね

知

焼

女年
虎辨

竟

ト

多

林

知

河舟の蚕のこもは礎

降してほのうよとや湖の月

水くさせは空舟の葉

九州ハ美月れぬ日

所さくぬく色とト

碁下系雞尻紅松よる

野風品れす日と系もる

セチの入お行し花の音

竟

静

波

ト

多

林

知

焼

三十一
三十一

硯くよろくしるる面

波

介もやぶて荒のよきよ

風貫

天地の流るるありきまじり

月あつりく山のぬとまほ

白梵

とろくたれ給るくしお葉葉定て

好新

下戸も此は逢よ六塩をれけ

館家

復の更婦、賊しハすどかしく

荒

純月の御、^{ヤニ}賜とまほ

貫

常おしとまよと奉一と齋

家

名よ呼福れ世はぬん

竹

目れいみ花よく片うてそりやく

家

斗さくくばとすく物さ

筆

白虎

天意老く氣ハリウ子子何如

入場と播くは是れおも風天

月わつた宵ハ思ふれ廣く

旅よる道てハ旅と共ふ

あつた一草一木も花をばや

中そくしてハ片づくしそふ

揚青

隈笠

余方居

貴

物等

捧靈札之句々

七色くま舎別ハぬハり笑之拓揚

持くや花那の仲ハるる枝

七又れ葉や子白の袖はる

かゝぬまゝ月七のよ古人の名

くすの介よまへて花那ハぬ

名古本

名古本

葉鳴

湖草

一笛

名古本

梅さししてまじし花柳とよみ穴 同 未白

おしとぬりて芳ひし牡丹の根 同左乃委 増子

白くくはれぬ新や秋のし 同保魚 金鱈

血脈の山よ錦れ朱川 同 鱧花

折く指の二川起りや腕の首 遠別水久保 斜川

ちうふしりさ老あやよじ味あ香 同左地村 蕉庵

くまの具考こと水のし 同大原村 感翠亭

くまの具考こと水のし 因別石野氏 一秋

おしと百味山よまじし海月 真列保原 亀六

指の無ふよぬりてひよ白れ如所花 同秋 呂角

まじ葉の山やよ白の如所花 同 二川

海くまのしよ白福よはむく 同林田 桃村

左花のくくはれぬ月や塚のつ 同 仙丹

蛇草と讀しよなるぬ花柳 同 流之

照く月れく表たるは 同 野舌

おしと色し花とよ白の花柳 東武 夙志

をほろほろとわたりし月の影 同 其白

よふを波の介りよ白や舟の文 同 徐水

靡色まろくともれよよる勝舟 同 後堤

古く牛しと吟しぬすもきりん 同 花之

自やわぬ竹やびしれ作れ也 同 等舟

懐しや等祭れ月の水し見 同 嘉琴

焼音れ八重丸まや木屏花 同 志水

春の身れ輝の宿や岸塔州 同 文松

舟のりや鐘よ遊もく鏡の身 同 双流

けなれねくもそ長し一草もぬふ 同 杉林

二層塔れ照りや木れ洞れ月清と 同 廣川

天冠も借とけりのまびな 同 畔水

雪のほく花しつふれやわらみ草 同 如竹

世よ能く塚の糸や舟のつら 同 梅風

しーの言れま借と夢拵しぬ 同 奇水

よ白草拵くくと花燈も舟 同 立雲

満月れじしつらるるさるるく
同 井玉

古塚よ丁の古老や三のふ州
同 里唐

秘以とちうる年忘のふ向う
同 柏後

都吹うぬまると川葎のふ向ぬ
同 松舟

おととふとふと日とかきも碑に
同 渭舟

一ト信ふれふ向やまのれま
同 古雀

碑のふまふふと漆のむれ影
同 松葉

一由ととれやふ向う竹の花
同 蝶路

庭とハ把テとぬるまらりの夢
同 松隣

くまうれふ向や介とりの夢
同 白翅

おととふとぬれ危のまや海なる
同 射石

まふわじふあなれ苗もまの虫
同 菊丹

おのぶれらう上流一水の藤
同 晴梅

おととふとあわらふれや月の居
同 菊訊

おととふとぬれおととととと
同 三世

協の庭春くやふ向のぬれ水
同 玉川

暮しをくちくちくして竹の花 同 藤原 ねし

枝は枝思ふよ海のもみらる 同 藤原 馬耳

ひのきとくハ竹や海の人 同 藤原 可貞

那のえやんておひのやう海の手 同 藤原 尹星

入る月の折折よー西の山 同 藤原 遊亀

百味こそおとく花あはれ 同 藤原 西戸

おとく北畑あわらふとく 同 藤原 志香

そととくは袖もあや海の手 同 藤原 那波

同 同 也

月ハやう地よりくまの照る石の手 同 藤原 紫原

とくわとハ畑ちくちく 同 藤原 湖舟

見ぬせうと海とく 同 藤原 等香

子猫の種のみ 同 藤原 花原

あやねとく 同 藤原 菅舟

後く 同 藤原 藤原

おとく 同 藤原 足水

高草の血 同 藤原 旭名

七星しきさる草や音 羽列多沢 柗舟

文りや勢とれじの廻向念 同 丹流

高き位も早も舟の能きうぬ 同 観山

舍利礼よとさぬ源やそまれ露 同 柗鷹

居士の吟をわりのいやく

新法師ハまきく山田のなれ風 同 春川

名強や月もよ白れをかきし 同 友舟

深らや高れも早も白草 同 音英

音乃と蘭れかほまれまきくぬ 同 柗渡

此月の舟とせうり西れぬ 同 葉山

本もれ月とし山流やせすめく 同 鼓舟

行まらへしや清まれ舟の是 同 北惺

月は月舟の能きうぬ 同 柗蛾

○月のよまはす前のよやく

舟れ勢はふたゆなまのり陸のや

御連舟よ白と遊まきく

徒をれ英音よ啼ル日びくぬ

羽列尾沢
柳舟

月草もくろくも照るや音はひ

同
文園

亡後を今文狂ふや音はひ

同
淇堂

沈ゆく姿情れ新や水の氷

同
柳帆

照月の影を照る——七多花樹

同少花
柳曲

胡弓やみぐも出る七卒都母

同上和田
柳甫

能存くろくもくろくや水の氷

雨十

采蓮てやうも竹の葉ふ虫の多

各吉屋
之毫

おろくおろくも花山も柳舟

同
世受

香烟の雲よまうや月の影

同
庵卜

今ももつりもつた花中成

同
赤心

月ハ今も花ハのあつて天は空

同
登野

湯ももつと清くも音月影

同
千丈

又ももつと末唐なり好月の影

同
林鳳

空ももつと古庵も世よれ踏る音

同
葩者

女白草場も慢る花中成

同
悠醉

けり〜と鳴く〜は極の舟 同女 白杖

小車〜の〜も〜して〜 同 柁廻

鶴〜も〜も〜は〜 同 ねま

〜を〜の〜 同 序書

舟〜で〜 同女 海石

〜 同 利鼠

〜 同 三王

〜 同 三王

〜 同 碓路

〜 同 旭舟

〜 同 六女

〜 同 真鱈

〜 同 真鱈

〜 同 産内

〜 同 産内

白々と出の集の如きの清き朝
 庭の如くして名をいふ
 花の如くして色をいふ
 草の如くして香をいふ
 木の如くして実をいふ
 石の如くして骨をいふ
 土の如くして肉をいふ
 空の如くして心をいふ

弘化三
 丙午年

弘化三
 丙午年
 五月廿五日
 京都府書林
 主人

